

「同化・異化」概念の混乱

——読者論の必要性——

池田 久美子

「同化・異化」概念は、西郷竹彦氏の文芸理論において、視点論と読解指導論とを関係づける鍵概念として構想されている。拙論では次のことを指摘する。

- (1) この「同化・異化」概念が混乱していること。
- (2) その混乱は、読者論を構想しえていないことに起因するものであること。
- (3) また逆に、その混乱ゆえに読者論を構想する道を封じてもいること。

一 紹介——西郷氏の「同化・異化」概念の定義——

小学校四年生向けの教材に、今西祐行作「ひとつの花」という作品がある。冒頭の部分はこうである。

「ひとつだけちょうだい。」

これがゆみ子のはっきりおぼえた、さいしょのことばでした。まだせんそうのはげしかったころのことです。

……たべるものといえば、おこめのかわりにはいきゅうされる、おいもや、まめや、カボチャしかありませんでした。まい日、てきのひこうきがとんできて、ばくだんをおとしていきました。……ゆみ子はいつもおなかをすかしていたのでしょうか。ごはんのときでも、おやつするときでも、もっと、もっと、といて、いくらでもほしがるのでした。

すると、ゆみ子のおかあさんは、「じゃあね、ひとつだけよ。」といて、じぶんのぶんからひとつ、ゆみ子にわけてくれるのでした。……

「なんてかわいそうな子でしょうね。ひとつだけちょうだいといえは、なんでももらえるとおもっているのね。」
あるとき、おかあさんがいました。

すると、おとうさんが、ふかいためいきをついていました。

「この子はいっしょう、みんなちょうだい……といて、りょう手をだすことをしらすにすごすかもしれないね。……いったい大きくなって、どんな子にそだつだろう。……」⁽¹⁾

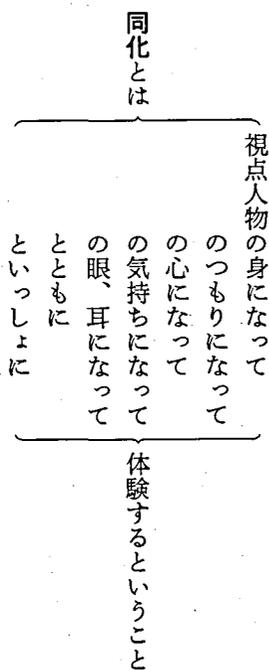
右の作品の登場人物は、「おとうさん」「おかあさん」「ゆみ子」の三人である。物語はこの三人によって展開する。しかし、たとえば「ゆみ子はいつもおなかをすかしていたのでしょうか」と語るのは、だれか。この人物は、「ゆみ子」の言動を外から見て語っている。それは、「おとうさん」でも「おかあさん」でもない、第三者である。

西郷氏は、この人物のことを「視点人物」あるいは「話者」という。そして、「視点人物」によって見られている人物のことを「対象人物」という。見ている方の人物を「視点人物」、見られている方の人物を「対象人物」というのである。この作品では、「視点人物」＝「話者」が、「対象人物」である「ゆみ子」たちを外から見て語るといふ形

式になっている。これを氏は、「話者」が「外の目」で見ているともいう。⁽²⁾

西郷氏はこのように説明することにより、単に「ゆみ子」たち三人のみではなく、三人を見て語る人物、「視点人物」の存在に注目する。「視点人物」に注目するからこそ、「読者」は初めて「ゆみ子」たちの言動が「視点人物」の目を通して見られ語られたものだということがわかる。「読者」は「ゆみ子」たちの言動について考えるだけではない。「視点人物」がそれをどう見ているのか、どう語っているのかという、語り方そのものを問題にすべきなのである。

西郷氏の「同化・異化」概念は、以上のような「視点人物」論に基づいて構想されている。氏は、「同化・異化」概念を次のように定義する。



……読者は、視点人物と同化して視点人物の体験とともに体験しながら（身につまされ、われを忘れている）他方では、視点人物をもつきはなし、一步身をひき、あるときは批判し、客観化しています。これを異化といいます。⁽³⁾

整理して示す。

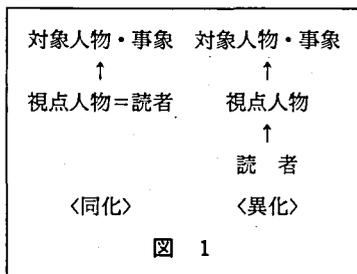
「同化」——「視点人物」の「身になる」こと。（「身につまされ、われを忘れてる」）
「異化」——その「視点人物」をも「つきはなし」「客観化」すること。

要するに、図1のような構造を西郷氏は構想していることになる。

この定義によれば、「読者」は「ひとつの花」を読む場合、次のような読み方をする
ことになる。

「読者」は「対象人物」である「ゆみ子」たちを見る「視点人物」になりきらねばならない。「視点人物」の「つもりになって」「ゆみ子」たちの言動を見て感じなければならぬ。たとえば、「ゆみ子はいつもおなかをすかしていたのでしょいか」と「視点人物」が見れば、「読者」もそのように見なければならぬ。これが西郷氏のいう「同化」である。

一方、「読者」はこの「視点人物」をも「つきはなし」「客観化」しなければならぬ。たとえば「ゆみ子はいつもおなかをすかしていたのでしょいか」という一文を、「視点人物」が「ゆみ子」の言動をこうみなしているのだとしてとらえなければならぬ。「あるときは批判し」てよいのだから、「読者」は「視点人物」のこのみかたが適切か否か、考えることも許されよう。これが、「異化」である。「異化」するときには、「読者」は「われを忘れ」てはならない。「同化」とはちがうのである。



二 分析と批判——「同化・異化」概念の混乱——

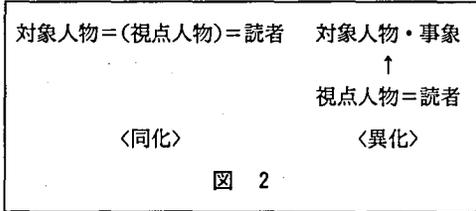
(一) もうひとつの「同化・異化」概念

ところが、西郷氏は具体的な作品解釈になると、右の定義とはちがう意味で「同化・異化」概念を使用する。結論をいえば、氏の「同化・異化」概念は、図2のように変質してしまうのである。

例を挙げる。

(例一)

(読者は……引用者註) おとうさんのようすを見ている人間、おかあさんのようすを見ている人間……の立場になって読むのです。……目撃者の体験、異化体験をめざすのです。……話者の語りを通して、話者とおなじ気持ちでそこに居あわせるような体験をするわけですね。⁽⁴⁾



西郷氏は右で、「異化」を「話者」、つまり「視点人物」と「おなじ気持ち」になることだとする。「視点人物」を「つきはなす」どころか、「おなじ気持ち」になることを、「異化」といっているのである。これは、先の「同化」の定義そのものではないか。先の定義では、「視点人物の気持ちになって体験すること」を「同化」と呼んだ。これと同じことが、右の論では「異化」と呼ばれている。

(例二)

「ひとつの花」は、先の冒頭部分の後、いよいよ「おとうさん」が応召する別れの場面を迎える。「ゆみ子」は「おかあさん」と見送りに行く。「ところが、いよいよ汽車がはいってくるというときになって、またゆみ子の『ひとつだけちょうだい』がはじまったのです。⁽⁵⁾」

この部分について、西郷氏はいう。

……話者が、どんな気持で語っているのか。……へところがですね、あやされてお利口さんしているのに、へいよいよ汽車がはいってくるというときになって」というのは、最後の、ぎりぎりのときになってということ、そんな時になって、なんとまあ、へゆみ子のひとつだけちょうだいのはじまったのです……何とまあ、えらい事になったもんだと、こういう語り方をするわけですね。読者は、そういう言葉を聞かされると、どんな感じがしますか。……いくら小さいとはいえ、こんな時にむずかり出してしょうがないなという気持があるでしょう。……これを読者の切実な異化体験というんです。⁽⁶⁾

氏は「読者は、そういう言葉を聞かされると、どんな感じがしますか」と問う。「そういう言葉」とは、「ゆみ子」の「ひとつだけちょうだい」のことである。氏は、「読者」に、「ゆみ子」のこの言葉を右のような状況下で大きくどう感ずるかと問うているのである。

ここでも、「異化」とは、「読者」が「話者」＝「視点人物」の気持と同質的な気持になることを指している。氏が例として掲げている「いくら小さいとはいえ、こんな時にむずかり出してしょうがないなという気持」は、単に、「話者」の語り方をなぞり、言い換えたにすぎない。まさに、「例一」にあるように、氏は「読者」に「話者とおなじ

気持ち」で「ゆみ子」の言葉を聞けと指示しているのである。いいかえれば、氏は「読者」に、「話者」―「視点人物」をではなく、「対象人物」である「ゆみ子」を、「話者」と「おなじ気持ち」で見るといっているのである。

〔例三〕

新美南吉作「ごんぎつね」に次の文がある。

「……二、三日雨がふりつづいたそのあいだ、ごんは、外へも出られなくて、あなの中にしゃがんでいました。」
この文について、氏はいう。

ここのところは、読者がごんに同化できるように表現してある文章になっています。……話者がごんそのものになって語っているのです。……ごんが視点人物とおなじになってしまっていて……いるのです。……読者は、ごんを外からながめ、ごんのすることを見て、あんなことをしている。あつ、あんなことしなければいいのに………というように異化体験している。そして、同時に、ごんという人物の身になって、その気持ちにたつて、その眼から、世界をながめ、兵十をながめ、ごんの気持ちをともに体験する。つまり同化体験をするのです。⁽⁷⁾

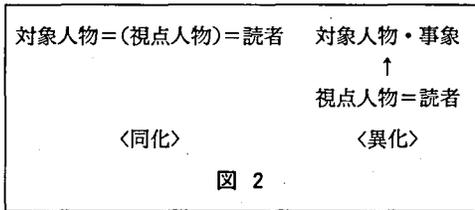
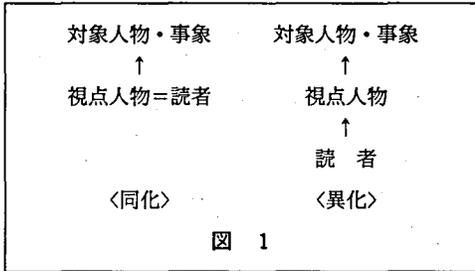
氏は、「ごんが視点人物とおなじになってしまつて」いるとして、「話者」―「視点人物」の存在を透明なものにする。したがって「読者」は、「視点人物」をではなく、本来「対象人物」である「ごん」を見て「異化」することになる。ここでも先の二つの例と同様に、「視点人物」そのものを見ることを「異化」とはいわなくなっている。「異化」とは、「視点人物」と共に「対象人物」を見ることに変わっている。

さらに、「同化」についても、先の定義とはちがっている。先の定義では、「同化」とは「視点人物」の「身にな

る」ことであった。ところが右では、直接「対象人物」の「身になる」ことを「同化」という。「話者」が「ごんそのものになって」いるがゆえに、「ごんが視点人物とおなじになっ」たと、氏は考える。「同化」とは、読者⇖視点人物⇖対象人物という一体化のことになる。⁽⁸⁾

以上の三つの例における「同化・異化」概念の意味を整理する。

「同化」——「視点人物」が「対象人物」に「なりきっている」場合、「読者」も「対象人物」に「なりきる」こと。
 「異化」——「視点人物」とともに、「対象人物」を外からみること。



(二) 二つの概念の比較分析

図1と図2とを併置して、両者を比較してみる。次のような問題が明らかになる。

(i) 図1での「同化」が図2での「異化」と同じ構造をなしている。つまり、図1での「同化」に相当する構造が、図2では逆に「異化」と呼ばれている。「同化」と「異化」とが、文脈によって意味の転倒をひきおこしているのである。甚しい混乱の事態である。

(ii) 一体だれについての、「同化・異化」なのか。いいかえれば、「同化・異化」の対象となるレベルはどこか。図1では、それは

「視点人物」であった。ところが、図2では「対象人物」に変わっている。「同化・異化」の対象となるレベルが、図1と図2とは異なっているのである。文脈によってレベルが定まらず揺れているのである。

このレベルの混乱が、(i)で指摘した意味の転倒をひきおこす要因である。

図1では、あくまでも「視点人物」に「同化」することであった。ところがその事態は、図2では「視点人物」と共に「対象人物」を「異化」することだという。これは、ひとつの事態を二つの異なった観点からみるみかたである。つまり、我々はひとつの事態について、対象となるレベルを「視点人物」に設定すれば「視点人物と同化する」ともいえるし、「対象人物」にレベルを変えてみれば「対象人物を異化する」ともいえるのである。

ところが西郷氏は、定義において、「異化」とはあくまでも「視点人物」をつきはなして見ることだとする。「異化」の対象を、「視点人物」に固定しているのである。したがって、これでは「対象人物」を「異化」するという部分は、定義から欠落してしまう。氏の定義からは、「対象人物」を「異化」することは絶対に出てこないはずなのである。

ひとつの事態が対象となるレベルの定め方によって「同化」とも「異化」ともいえるということを、氏は、定義においても、実際の概念使用においても、自覚していない。自覚のないままに、実際の作品分析では図2のように、定義に反してレベルを暗黙裡に変えている。つまり、自分で対象とすべきレベルを指定しておきながら、自分でそれを破るという矛盾をおかしているのである。氏は、このレベルについて無自覚である。

(iii) 図1では、「異化」において、「対象人物」「視点人物」「読者」の三者がそれぞれ独立したレベルに配置されていた。「対象人物の見方」「対象人物を見る視点人物の見方」「視点人物を見る読者の見方」という、三層から成る重層構造が構想されていた。そしてこれによって、三者のレベルの相対的独立性が一応確立されていたのであった。

ところが図2では、この重層構造と、それが保証していた三者の相対的独立性が失われてしまっている。たとえば、「視点人物を見る読者の見方」のレベルは、図2では「対象人物を見る視点人物の見方」と同一化されてしまう。さらに、その「対象人物を見る視点人物の見方」のレベルすら、「対象人物の見方」に同一化され、独自のレベルとして成立しえなくなっている。いわば、「読者」が「視点人物」に、さらにその「視点人物」が「対象人物」に吸収され、単なる同一平面上の等価関係しかもちえなくなっているのである。

図1で不徹底ながらかろうじて構想されていた三者の重層構造は、こうして図2において崩壊し、同一平面上の等価関係へと変質してしまっている。構造的にこれほどあい異なるものを同じく「同化・異化」と呼ぶことは、概念の甚しい混乱である。

「対象人物」「視点人物」「読者」は、いずれも「人間」であるという点で共通している。これらはいずれも「人間」の比喩である。「人間」の比喩なのだから、これらがそれぞれ一つの人格的まとまりをもつものであり、安定した単位として、相対的に独立した存在であるということが前提されているべきである。三者の重層構造は、まさにこの前提の上に構想されたはずであった。

ところが、図2では、この「人間」の比喩のもつ相対的独立性という性格は全く失われ、無意味なものになってしまった。いわば、三者の「人間」としての存在感がなくなってしまったのである。たとえば(一)の〔例一〕で、氏は「(読者は)おとうさんのようすを見ている人間……の立場になって読むのです」という。「異化」すら、「読者」は、自分ではなく他人の立場になって読むことを要求されている。「読者」自身の立場で読むことは、氏の論のどこにも保証されていない。自分の立場で読むことを保証されない「読者」に、「読者」と呼ぶだけの独立性と人格的まとまりがあるか。「読者」は存在感をもちえない。

以上のような西郷氏の論では、三者それぞれの見方の相対的独立を保証し相互のちがいをこそ明らかにしようという方向に分析を進める道は封じられる。そして、三者の重層構造を一貫させることができなかったところに、(ii)で指摘したレベルの混乱をひきおこす原因がある。

(iv) 特に、「読者」の独自のレベルが図2において完全に失われたという事態を重視すべきである。「読者」独自のレベルは、図1の「異化」においてかろうじて保証されていた。ところが図2においては、もはやそれはどこにもない。残されたのは、「対象人物」や「視点人物」と一体化した「読者」だけである。「読者」には、「身につまされわれを忘れ」てこれらの人物と他人と一体化するという役割が残されているのみである。

西郷氏のいう「読者」とは何か。
氏はいう。

「一般に読みの視点は作品の視点と対応しています。〈内の目〉でえがかれた作品においては、読者はその視点人物と同化して、その人物の目で世界をながめます。」⁽⁹⁾

「私は視点論の考え方から、……このばあいは『人物は知らない。読者も知らない』という関係であると考えます。……あれこれ大工さんの内面、心情を想像してみてもわかりません。……読者はひたすらおみつさんに同化して読みすすめていいのです。それこそがすなおな読みということでもあるのです。」⁽¹⁰⁾

要するに、作品の視点が設定されている通り「読者」も同じ視点で読むことを、氏は「すなおな読み」として望ましいものと評価する。いいかえれば、氏は、作品の要求する通りに「読者」が読むことを第一義的に重要だとみなし、そのように読ませることに努めるのである。

「読者」は、「身につまされわれを忘れ」ることを要求される。あるいは「話者」と共に、「対象人物」を見ること

を要求される。氏が「読者」に要求するのは、この二つのことしかない。われを忘れず堅持したり、「話者」とは別の見方をするには、氏の論の中では決して要求されもせず、保証されもしない。

「われを忘れ」たり「話者」と共に、であれということとは、「読者」が別の見方もしうる一個の独立した人格であれということとは、むしろあい容れない。その要求は、「読者」に自己を空しくすることをこそ求めるものにほかならない。氏の「読者」とは、独立した人格をむしろ失った、作品の要求どおりに従順な読み方をする読者である。

氏が「読者」の独立性、独自性を認めていたならば、(iii)で指摘したような重層構造の崩壊は防ぎえていたであろう。「読者」に対して固有の独立したレベルを割り当てざるをえなくなるからである。しかし、氏のいう「読者」はそのような固有のレベルを割り当てられるにはあまりに存在感のない、軽い存在であった。それは、簡単に他人と一体化し「われを忘れ」るような存在であった。

また逆にいえば、氏が図1の「異化」でかろうじて構想していた三者の重層構造を簡単に崩したりすることなく一貫させていたならば、氏は、「読者」の独立性、独自性を認識せざるをえなかったであろう。なにしろ、「読者」に対し独立したひとつのレベルを割り当てることは、いやでも「読者の見方」の相対的独立性を自覚せざるをえなくなることだからである。氏は、読者論を構想する道を、自ら閉ざしてしまったのである。¹¹⁾

三 提案——読者論の必要性——

〈読者〉という概念を、次の二つに分割しよう。

〔読者1——作品（あるいは作者）が想定する読者
読者2——現実の読者〕

このように分割した上で、西郷氏の「読者」概念を再びみてみる。二節で私は次のことを指摘した。

「氏は、作品の要求する通りに『読者』が読むことを第一義的に重要だとみなし、そのように努めるのである。……氏の『読者』とは、……作品の要求どおりに従順な読み方をする読者である。」

「作品の要求どおりに従順な読み方をする読者」が〈読者1〉に相当することは明らかである。西郷氏の「読者」とは、〈読者1〉である。そして、〈読者2〉は、氏の理論には位置づけられていない。

たとえば、先の〔例一〕〔例二〕で紹介した氏の論述はどうか。

〔読者は）おとうさんのようすを見ている人間……の立場になって読むのです。……話者の語りを通して、話者とおなじ気持ちでそこに居あわせるような体験をするわけですね。〕

「……いくら小さいとはいえ、こんな時にむずかり出してしょうがないなという気持ちがあるでしょう。」

「話者」と「おなじ気持ちで」、いいかえれば「話者」と一緒になって「しょうがないな」と思う。このような読み方するのは、〈読者1〉である。「ところが、いよいよ汽車がはいってくるというときになって……」という一節を読んだ読者が一緒になって「しょうがないな」と思うのを当てにして、作者はこの一節を書く。このとき作者は、そう反応してくれる読者を想定しているのである。西郷氏は、この作者が想定する読者の読み方について論じ、具体例を示しているにほかならない。

二節(ii)の(iv)で、私は氏の次の論述を引用した。

「一般に読みの視点は作品の視点と対応しています。」

「……それこそがすなおな読みということでもあるのです。」

「作品の視点」と同じ視点で読む読者とは、〈読者1〉である。氏は要するに、作品の指示どおり、忠実に読めと主張しているのである。〈読者1〉の読み方を「すなおな読み」と称しているのである。氏は「すなおな読み」をする〈読者1〉であれど、読者に要求しているわけである。

しかし、〈読者2〉は、必ずしもそう読むとは限らない。〈読者2〉は、必ずしも〈読者1〉と同質ではありえない。〈読者2〉は、〈読者1〉から相対的に独立した存在である。〈読者1〉とは異なる文化状況において生き、独自の関心領域をもち、その中でもものを知り考える存在でありうるのである。そしてまた、そのような存在でありうる自由と権利をもつてもいるのである。

〈読者2〉は、たとえば次のように読むであろう。

(例1)

「ゆみ子」の両親は、娘の「ひとつだけちょうだい」という欲求の真の原因を正しく洞察しえていない。

たとえば、「ゆみ子」は出征する父親を見送りに行く途中、母親が父親のために用意した握り飯を「みんなたべてしま」った。それなのに、「いよいよ汽車がはいってくる」というときになって、また「ひとつだけちょうだい」と言い出した。

「みんなたべてしま」ったというのだから、握り飯は複数個あつたはずである。幼児である「ゆみ子」が本来大人のために用意されていた握り飯を複数個「みんな」食べてしまえば、もう満腹するはずである。通常、幼児の食事量など知れたものである。せいぜい大人の半量程度である。したがって、「ゆみ子」がこの上にまだ食べ物を欲しがるということは、空腹ゆえとは思えない。むしろ他の原因、特に何らかの精神的原因をこそ考えるべきである。その証

腕に、あれほど「ひとつだけ、ひとつだけ」といつていたのが、たった一輪の花で満足し、もはやものを要求しなくなるではないか。

「ゆみ子」は常日頃、いもやカボチャを自分の分だけでは満足せず、「ひとつだけ」といつて母親から分けてもらっていたという。この種の食物を何切れか食べられれば、幼児としては格別飢えていることにはなるまい。にもかかわらず、両親は請われるままに食物を与えるという行為をくり返し、しかも充分に食物を与えられないという意味で娘を不憫に思っていたというのである。

幼児の食事を的確に把握していないという点でも、精神的原因をも含めて広く原因を考えようとしていないという点でも、両親はだめである。愚かである。あるのは盲愛だけである。子育ての知恵が無い。「ひとつの花」は、これでは愚かな親の話になってしまう。

(例 2)

この作品に描かれている戦争状況は、まだずい分ゆとりがあり、のん気である。なぜか。

①食糧が乏しいといっても、まだ「おいもや、まめや、カボチャ」がある。しかも特別の場合には、米の飯まで食べられる。戦前の日本でふだん米の飯や「キャラメルだの、チョコレートだの」を食べられる階層は限られていた。そうしたものが食べられないからといっても、戦時中の食糧事情の苦しさの証明にはなるまい。むしろ、食糧流通の国家統制が敷かれていた戦時中は、国民は平均して物を食べられたとすらいえる。敗戦後の国家統制が崩れた時期の食糧事情の方が、よほど悪かったといえるのである。

②父親は、「いったい大きくなってどんな子にそだつだろう」と娘の将来を案じている。まだのん気なものである。娘の将来を案ずるだけの余裕があるからである。明日の命すら保証されないという切迫した生存の危機においては、

このようなセリフはとも出てはこないであろう。たとえば戦争末期の沖縄戦のとき、住民はこんなセリフを語れるか。あるいは敗戦前後、旧満州においてソ連軍に追われて逃げまどった人々は、そのときこんな心配をする暇があったか。今日を生きのびることがすべてである。将来にわたって娘が生きのびられるという前提がなければ、将来を案ずることなどお笑い草である。戦争末期ですら、本土の住民はこのようなことを案ずるゆとりがあったのであろう。その幸せをこそ、人は思うべきである。

〈読者2〉は、以上のような自分の読み方と対比して、この作品について、とりわけこの作品が当てにしているであろう読者Ⅱ〈読者1〉について考える。次のようにである。

この作品は、戦争末期の生活と戦後の「平和」な生活を対照させ、それによって前者の辛さ苦しさを際立たせるという手法をとっている。これは、戦後の我国で戦争を問題としてとりあげるときの常套的な手法であった。個々人が体験した辛さ苦しさをとり立てて強調することにより、もう戦争は嫌だという厭戦感情を喚起させる。人は、種々に語り継がれる戦争末期の悲話を聞き身につまされる。そして、戦争が個人にもたらす辛苦と悲惨ゆえに戦争を忌み厭う思いを分かちあつたのである。

〈読者1〉はまさにこの種の読者であると〈読者2〉は思う。「すなお」に「ゆみ子」の両親の苦衷を察し胸を痛める。一輪のコスモスの花を残して出征した父親の思いに共感し、戦争の惨禍を越えて花開いたコスモスの群生に父親の愛情を見る。たとえば西郷氏の次のような読み方は、その典型である。

「(戦争の……引用者註)悲惨さ、苛酷さ、そういう非人間性というものを、やっぱり具体的に把えさしていく。……二番目には、にもかかわらず、いかに戦争という悪魔の力を持ってしても、……愛の力というものは、滅す事はできない。平和への願いというのは、押し潰すことはできない。」⁴⁰

さらに〈読者2〉は思う。

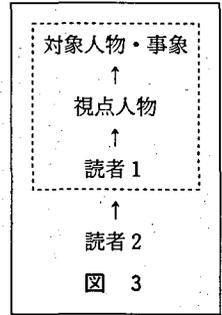
〈読者1〉は、戦争に関する事実をろくに知らない。当時のことを充分に知っている読者に対してであれば、このようにずさんな事実関係に基づく作品では説得力をもてないであろう。たとえば(例2)①で指摘したような、当時の食糧事情についてのとらえ方がある。あるいはまた、町が空襲で焼かれた時期の問題がある。町が空襲の対象になったのは昭和二十年にはいつてからであり、その頃父親が出征したとすれば、コスモスの花など咲く季節はない。もつとも寒冷地では、春にコスモスが咲いたりするので、そうなるとこの作品の場面はその辺りになるのであろうか。

〈読者2〉は、このようにいい加減な戦争認識でどうして戦争を扱う作品が書けるかと思う。事実関係の構成の粗さにしらけてしまう。このような粗さに気づかず、それが気にならない読者のみが、この作品を読んで納得できるのである。〈読者1〉とはそうした読者だと、〈読者2〉は思う。

〈読者2〉はたとえば武田龍夫氏の「嵐の中の北歐」(昭和六十年四月発行・中央公論社)という本を思いおこす。そして、そこで描かれているフィンランドの冬戦争の状況と、それを戦った人々の認識と行動とをみると、戦争が個人にもたらす辛苦と悲惨ゆえに戦争を忌み厭うという発想の底の浅さを感じる。自国の存亡と個人の生活の平和との関係を幻想ではなく現実的につきつめて考えることができているか、疑問に思う。「ひとつの花」は、自国の独立が失われ、自分たちの文化と土地を失うという苛酷な敗戦体験を経なかった国においてだからこそ、書かれ、読まれるにすぎないと、〈読者2〉は思う。

以上のような〈読者2〉の読み方は、くり返すが、西郷氏の理論では保証されていない。私は、図3のような構造において〈読者2〉を位置づけるべきであると考ええる。

〈読者2〉は作品を読んで、その作品を分析する。そのとき〈読者2〉は、単にその作品の内部構造、たとえば視



点がどこに設定されているかとか、どのような象徴表現が用いられているかなどということだけを分析するのではない。そうした種々の手法を用いることにより、その作品が一体どのような読まれ方を期待しているのか、いいかえれば、どのような読者に向けて書かれているのかをも想定するのである。つまり、〈読者2〉は、図3の点線枠の内部構造を分析するのである。これが〈読者2〉の仕事である。

西郷氏が文芸理論とそれに基づく読解指導論を構想するときに視野に入れていたのは、図3のうち点線枠の範囲にすぎない。その点線枠の部分を外から見ると〈読者2〉の存在は、排除されていた。しかし、より正確に言えば、氏は〈読者1〉と〈読者2〉とを分割し、それぞれの独自性を認めた上で両者を関係づけるという発想はなかったのである。氏は、作品を正しく読めば〈読者1〉のような読み方をだれもがするはずであり、また、しなければならぬと考えていた。そして、だれもが〈読者1〉であれと要求していたのである。作品の内部構造を分析すると、その作品をどう読むべきかについての客観的な基準が明らかになる。その基準が読者に読み方を指定する。その基準を客観的に明確化することが、氏の文芸理論の使命であった。

「同化・異化」概念も、もともとこうした発想のもとに、読者が〈読者1〉にならんとする目的に奉仕するために作り出されたものである。したがって、〈読者2〉の読みの自由と固有の役割を論ずるには、自ら限界があったのである。「同化・異化」が読者の読みの活動についての用語でありながら、実例においてきわめて狭い不自由な読みしか出てこないのは、その限界ゆえである。

しかしながら、一方では、「ひとつの花」がこれまで読まれてきた仕方とは殆ど氏の示したような仕方と大差なく、多くの人々によって氏の読み方が支持されてきたという状況がある。いいかえれば、〈読者1〉と〈読者2〉との際

立った対立が殆ど起こらなかったという状況がある。これは、この作品が〈読者2〉のおかれている時代における常識的な、通念としての「戦争と平和」観に立って書かれたからであろう。その通念の問題、限界を自覚し、それに抵抗して書かれた作品は、少なからず〈読者1〉と〈読者2〉との対立をひきおこす。〈読者2〉は非常に抵抗を感じるであろう。その点、「ひとつの花」はその時代においては常識的な発想のもとに書かれたといえる。

西郷氏が自分の読み方を、まさに作品の側が要求する通りの正しい読み方だとし、普遍的な読み方としたのは、作品の内部構造を分析した結果ゆえというだけではない。氏自身も、また多くの人々も、観念的に〈読者1〉と〈読者2〉との対立を体験しえなかったということでもある。つまりきわめて同質的な文化状況において同様の通念を共有していたがゆえなのである。氏の読み方を支持しているのは、作品の内部構造だけではありえない。それだけでは不当に狭い見方であり、錯覚である。読者たちの共有する同質的な文化が、それを根底から支えているのである。〈読者1〉と〈読者2〉それぞれの文化の同質性と異質性を分析することが必要である。氏の「同化・異化」概念では、この分析が全く欠落してしまうのである。

〈註〉

- (1) 西郷竹彦『西郷竹彦文芸教育著作集 第二卷』（一九七五年一月刊・明治図書）198～199頁。教科書では一般に「ひとつの花」ではなく、「二つの花」という題になっている。（※以下『西郷竹彦文芸教育著作集』の引用箇所については、巻数と頁数のみ記す。）

- (2) 第二卷、227頁。

- (3) 第一七卷、349～350頁。

(4) 第二卷、242頁。

(5) 第二卷、200頁。

(6) 第二卷、243頁。

(7) 第二卷、54頁。

(8) 「視点人物」が「対象人物」と一体化して独自の存在でなくなってしまうことについての批判は、次の拙論で既に行な
った。

「視点」という比喩の限界——視覚は心ではない——」（『国語教育研究』第100集・昭和五五年九月刊・日本国語教育学
会）

(9) 西郷竹彦「文芸の授業と視点論」（『文芸教育』26号・昭和五四年五月刊・明治図書）19頁。

(10) 同右、9頁。

(11) 以上の「同化・異化」概念の混乱についての分析・批判は、次の先行研究論文と共通の性格をもつと思う。

宇佐美寛「同化」・「異化」概念の粗雑・混乱」（『文芸教育』37号・昭和五八年一月刊・明治図書）

共通であるのは、「対象人物」「視点人物（話者）」「読者」の重層構造において、西郷氏の「同化・異化」概念の混乱を明
らかにしようとした点である。「同化・異化」概念の分析に関する先行研究は、右の論文以外にはめぼしいものは無い。

しかし、この拙論は、「読者」概念の分析に至り、その分析において西郷氏の「同化・異化」概念の問題点を明らかにし
た点で、先行研究とは異なっている。

(12) 第二卷、271〜272頁。